

防衛大学校本科第2期学生及び理工学研究科第15期学生  
卒業式における学校長式辞（昭和53年3月19日）

本日、ここに防衛大学校本科第2期学生及び理工学研究科第15期学生の卒業式を行うに当りまして、安倍内閣官房長官<sup>注(1)</sup>、金丸防衛庁長官<sup>注(2)</sup>をはじめ、内外から多数の来賓並びに父兄の方々の御臨席をえましたことは、卒業生はもとより、防衛大学校にとりまして無上の光栄と存じます。来賓各位の御厚意と父兄の方々の御熱意に対し、心から御礼申し上げる次第であります。

今回、卒業の栄をになう本科学学生は472名、理工学研究科学生は73名であります。本科卒業生は、本年4月から陸・海・空各自衛隊の幹部候補生学校に進み、幹部自衛官となるための教育を受けます。また研究科卒業生は陸・海・空の各部隊や防衛庁の各機関において、それぞれ重要な任務につくことになっています。

このおめでたい日に当り、私はまず卒業生諸君の洋々たる前途を祝福し、本科並びに研究科の卒業生諸君が、今後、幹部自衛官として防衛の専門家として、ただ一筋の道をまっすぐに前進されるよう求めたいのであります。幹部自衛官は、高度の知識と技能とを必要とする専門職であります。

およそ、すべての専門職の養成には長い年月を必要としますが、特に防衛の分野においては、精密誘導兵器、遠隔操縦兵器等の例を見ましても、世界各国は国運を賭して、新しい科学技術の開発に装備の刷新に、そしてまた戦略構想の検討に全力を尽しておりますから、少しでも油断をすればたちまち専門家としては落伍してしまいます。もし万一、諸君が将来、防衛の専門家として世界各国との競争に落伍するようなことがあれば、単に諸君が個人として失格するばかりではありません。日本国の安全が失なわれるおそれがあります。

このことは、幹部自衛官が単なる一つの専門職ではなく、国家の安全に対して究極的に責任を負うところの特別の専門職であることを意味します。多数の主権国家が併存



第3代学校長 猪木 正道

---

注(1) 安部晋太郎

注(2) 金丸 信

しております今日の国際社会においては、それぞれの国家が自国の主権の及ぶ範囲内における平和と安全に責任を負うことは、自国の独立を守るために必要不可欠であるばかりでなく、世界の平和を維持するただ一つの有効な方法でもあります。この意味において幹部自衛官という専門職は、日本国の防衛のみならず、国際社会の平和と安全に対しても、崇高なる義務を負っているといわなければなりません。諸君が防衛の専門家として幹部自衛官の道をひたむきに進むとき、幹部自衛官は、国家的にも、また全人類的にも、もっとも重大かつ高貴な使命を負っていることを常に銘記して、これを誇りとされたいのであります。

次に私は、本科並びに研究科の卒業生諸君が防衛の専門家としての途に徹することの裏付けとして、職能倫理をしっかりと身につけることを要望いたします。諸君は、自衛隊の幹部として、将来陸・海・空の各種部隊を直接間接に運用する地位につくはずですが、防衛力はすなわち実力であります。この実力を操作運用する立場にある自衛隊の幹部は、防衛の専門家としての高度の倫理的責任感に貫かれているのでなければ、その重大な使命を達成することはできません。日本国民が防衛大学校の本科並びに研究科卒業生諸君に期待するものは、防衛の専門家としての国際競争力と、これを裏付ける高度の職能倫理とであります。

諸君が、このような日本国民の期待に十分応えることを確信して、私の式辞を終わります。